

3. 活動内容

(1) 【平成28年度の主な取り組み】

1. 「地域文化・歴史を学ぶ講演会」
2. 「防災プロジェクト」
3. 「熊野古道プロジェクト」
4. 「国際地学オリンピックへの協力」

【詳細】

1. 近隣地域において活躍されている方々の講演会 （「LHR」「総合的な学習の時間」「産業社会と人間」での実施）

- ① 4/18（月）「熊野古道のお話」 1学年
講師：熊野古道語り部友の会 山川 雅史さん
内容：熊野古道を歩くコースの遠足の事前学習として、熊野古道の歴史や意義、世界遺産登録の経緯などについて学んだ。
- ② 9/21（水）「観光から見た東紀州」 1学年
講師：「三重大学東紀州サテライト」三重大学 磯野 巧さん
内容：三重県の観光地の中で東紀州がどのような位置づけにあるか、データと意識調査を踏まえて話を聞いた。
- ③ 10/26（水）「東紀州の若者意識調査から」 1・2学年
講師：「三重大学東紀州サテライト」三重大学 市川 俊輔さん
内容：東紀州の若者に行った東紀州に関わる意識調査から、地域や将来に関することについて、高校生と対話しながら学習をした。
- ④ 11/9（水）「熊野の植生について」 1・2学年
講師：元尾鷲高等学校教諭 山本 和彦さん
内容：熊野の特徴的な植生について、主に絶滅危惧種を中心に話を聞いた。
- ⑤ 1/18（水）「棚田文化について①」 1学年
講師：丸山千枚田保存会会長 喜田 俊生さん
内容：熊野市紀和町にある丸山千枚田では、過疎化により棚田保全が難しくなり、全国からオーナーを募集してその保全に努力している。景観としても素晴らしい丸山千枚田を知り、地域保全のあり方について学んだ。
- ⑥ 1/25（水）「棚田文化について②」 1学年
講師：徳島大学客員教授 澤田 俊明さん
内容：徳島県上勝町における棚田を有効利用した先進的な取り組みについて学習した。

⑦2/1（水）「地域防災、地域に生きる」 2学年

講師：紀南病院医師 森本真之助さん

内容：地域における病院、医師の役割、および南海トラフ巨大地震に向けて、地域医療の観点から準備しておかなければならないことは何かなど日ごろの取り組みを中心に話を聞いた。

2. 防災プロジェクト（普通科4月20日・総合学科4月27日に実施）

《目的》

1. 本校から熊野市駅のあいだで登下校時に大地震・大津波が来ることを想定して、どこへ避難したらよいか確認する。
2. 実際に歩いてみることで、避難する際に自信を持って行動できるようになる。
3. 危険な箇所がどこにあるかなど、自分で気づき、考えることで、臨機応変に行動できるようになる。
4. クラスメイトと一緒に考え、共感することで、呼びかけあいながら避難できる関係を築く。

《内容》

1. 5限目各ホームルーム教室にて、地図を使った避難ルートの確認と説明
※実際に避難する際の危険箇所などを探しながら歩く
2. クラスに分かれて、地図を見ながら木本高等学校～熊野市駅の通学路やその周辺の街歩きをする（各班で防災ノートに記入）
（ルート：学校～高台～称名寺～ローソン～高台
～郵便局～陸橋・橋～市役所
～記念通り商店街～学校）
3. 各ホームルーム教室に戻り、各班で防災ノートの記入内容を整理
4. 後日、前回記入した防災ノートを見ながら、班ごとに発表

班単位で街歩きをすることによって、自分一人だけでは発見できなかった気づきを全体で共有することが出来た。避難経路や危険箇所をきちんと知っておくことは、自分たちの命を守るための第一歩であると考え、普段の登下校や学校生活においても周囲に気を配っておくことが大切だと感じさせる取組とした。

土砂崩れや津波の被害、家屋の倒壊や火災、停電、崖崩れなど、考えられる危険が数多く挙げられたが、危険の避け方として、すぐに高台に逃げることや、崩れそうな場所を予測しておいて、その場所には近づかないこと、消火器やAEDの位置などを確認しておくことなど、災害が起こる前の準備が肝要であることが、生徒の防災ノートでの気づきから明らかになった。今後も引き続き学校内外において防災意識を高める活動を推進していきたい。

3. 熊野古道プロジェクト

《目的》

平成16年7月、「紀伊山地の霊場とその参詣道」がユネスコの世界遺産に登録され、本校の立地する地域にある「松本峠」「浜街道」「花の窟」等も登録入りした。

しかし一方では、熊野地域の過疎化や熊野古道の語り部さんの高齢化が進行しており、その中での熊野古道の保全は今後の重要な課題となっている。そのため本校では、国内外からの熊野古道観光者をガイドすることができ、世界遺産の文化的価値を次世代に継承できる後継者の育成を目的として、生徒による「熊野古道語り部育成プロジェクトチーム」を結成する取組を平成24年度から行っている。

今年度は5年目となり、熊野古道「松本峠」と「鬼ヶ城」に関する学習を行い、三重大学の留学生に対して日本語及び英語でガイドをする活動を行った。

《内容》

(第一回) 事前学習と現地研修

1. 日時：平成28年11月26日(土) 13:00~16:30
2. 場所：熊野古道松本峠、鬼ヶ城
3. 参加者：木本高等学校 JRC 部員、有志生徒 計16名
木本高等学校教員 計2名

学校から最も近い熊野古道である「松本峠」について学習し、松本峠のガイドができるようになることを目標として実施した。

実際に松本峠を大泊側から歩き、昨年度、ガイドを行った上級生が各ポイントで説明しながら学習会を行った。生徒がガイドを行う時に配慮しなければならないことや、説明のポイントをお互いに確認しあった。その後、鬼ヶ城に行き、そこでもガイドのポイント、どのような説明を行うかなどを確認しあった。

帰校後、各自でガイド説明文を考え、それを使って、全員の前でガイドのデモンストレーションを行った。

終了後、生徒は、「熊野の地域をより深く知ることが出来て、もっと好きになった」、「海外からの留学生がまた熊野に来たくなるようなガイドをしたい」などと話し、今後の取組に向けて意欲的な姿を見せていた。

(第二回)

1. 日時：平成28年12月18日(日) 9:00~16:00
2. 場所：熊野古道松本峠、鬼ヶ城、花の窟神社、七里御浜、紀南ツアーデザインセンター
3. 参加者：木本高等学校 JRC 部員、有志生徒 計16名
三重大学学生(留学生含む) 計30名
三重大学ユネスコクラブ(代表者は教育学部技術・ものづくり教育講座：松岡守教授) 計5名

第一回目に行ったガイド学習会の成果を踏まえて、海外からの留学生を含む三

重大生に対して、日本語と英語で松本峠、鬼ヶ城のガイドを行った。生徒たちは、英語ガイド班と日本語ガイド二班（日本人参加者及び日本語が理解できる留学生を対象）の三班に分かれ、ガイドする箇所を分担した上で熊野古道の特徴や歴史などを説明した。

実際のガイドにおいては、最初は緊張している様子であったが、時間が経つにつれ年齢や国籍に関係なく積極的にコミュニケーションを取り、一人ひとりが準備と練習を重ねてきた成果を存分に発揮し、予想外の質問に対しても一生懸命説明する姿が見られた。また、日本人同士のやり取りにおいても、自分たちの地域に関する質問などに真摯に答えようとする様子が見られ、生徒たちの説明に対して歓声や拍手が起こる場面もあった。

鬼ヶ城の城址跡広場にて、参加者がそれぞれ持ち寄ったお弁当を広げて、昼食会を行った。そこでは学生たちの日ごろの興味・関心などが自然と話し合われ、交流の場となった。午後は、鬼ヶ城、花の窟神社、七里御浜と熊野市内の観光地を回り、三重大生や地域の方々との交流を図った。最後に紀南ツアーデザインセンターに集合し、職員の方から施設や熊野古道に関する説明を聞き、一日の反省会及び交流会を行った。三班に分かれて、日本語、英語によって一日の感想を話し合った。

生徒は、「初めて留学生の皆さんに会ったときは緊張や戸惑いもあったけれど、練習のおかげで楽しくガイドすることが出来た」、「もっと英語がうまく話せたら、もっと留学生との交流が出来たのに…、と勉強への意欲がより一層沸いてきた」などしように語っていた。

この熊野古道プロジェクトでは、文化遺産というものは、人が守り、人が伝えていくものであるということを改めて実感することができた。

4. 国際地学オリンピックへの協力

《目的》

第10回国際地学オリンピック（IESO 2016）が三重県で開催されるにあたり、その中の国際協力野外調査（ITFI）というイベントを、世界遺産熊野古道のある熊野で行うことになった。ユネスコスクールである本校の高校生が、ガイドとして調査に協力し、世界26か国から参加した108名の高校生が、4グループ16班に分かれて、4つの調査を分担して行った。本校からは46名の生徒が参加し、調査のサポートを行った。調査にはそれぞれ課題が与えられ、本校生徒は、その課題に対して地域に関する質問に答えたり、調査が円滑に進むよう協力した。

《内容》

8月25日（木）の野外調査当日に向けて、4回の事前勉強会を行った。調査を行う鬼ヶ城、七里御浜、同防風林の視察と現地における勉強会、また英会話のトレーニングを行った。野外視察では、危険個所の確認や基本的な地質学における学習を行い、それを英語で表現できるように各自が準備した。英会話トレーニングでは、自己紹介、学校紹介、熊野の紹介ができるよう本校英語科教員による学習会を行った。

当日は、4グループ16班に分かれて、グループごとに調査場所と課題が決められた。本校生徒は2～3名に分かれて、各班に配置し、調査場所に誘導した。調査

